

第三章 市川の地名考

市川には、いまでは使われなくなった地名も多い。ここではその由来等を調べてみた。

(一) 市川の発祥

元来、大門、高田、大鳥居、山家、上野の村落一帯を市川郷といった。名前の発祥にはいくつかの説がある。「往古、芦川が村の南を流れし時、本州(甲斐)第一の川なるをもつて、市川と名付けたる由」(「俚老物語」)とあり、また市川氏の居住地よりともいわれる。

往古、今の富士川町を中心に富士川北岸に発達した村落であった市川郷の民が、水害などの自然災害に追われ、今の平塩の岡一帯の台地に移り住み、弓削神社等の社領を併合して、市川氏なる豪族の手によりまとめられたものが市川庄になったというような説もある。なお、市川庄、青島庄についてもいくつかの説があるようだ。

古くは、市川と大門は二か所に分かれていて、市川は平塩にあったのを古名で「市川本

所」*1といい、平塩から水の便利を得るために、芦川の寄州に移った集落、これが「市川新所」で大門と呼び、現在の町並みのところである。

なぜ「大門」と称するようになったか記録にはないが、伝説には平塩寺の大門の地とか表門神社の大門の地とか言われている。後、平塩の家はほとんどここに移ったので、遂に「市川」と「大門」とを併せ呼ぶようになった。

最初に移り住んだのは今の八幡神社の西側付近の道祖神辺りだと言われている。その当時、平塩の岡は水の便が悪く、水の便のよい芦川の水辺(寄り州)に移ったのであろう、当時も紙漉きは行われていたが、それよりも水田を求めて移転したと考えられる。

(二) 市川の地名のいわれ

旧の市川大門地区には大字、小字、小名など含めるとおびただしい数の地名がありそれぞれに意味、いわれがある。(図3-1参照)

◆寄州(よろす)

かつて芦川は、平塩の岡の麓、今の市川本町駅辺りの低地を西流していて、多くの川中

*1 市川本所

「角川地名大辞典」によれば、「市川本所」の地名が初見されるのは天正五年(一五七七)の「武田家印判状写」とされている。

根は山の根っこ、麓を意味し、上は最上流部を意味する。市川地区の一番の上手で山の麓に位置することからと考えられる。

◆根の上
(ねのがみ)

根は山の根っこ、麓を意味し、上は最上流部を意味する。市川地区の一番の上手で山の麓に位置することからと考えられる。

◆上原（わはら）

塩沢川の扇頂部に位置し、町の一番上手にあたる平地であることから。昔、白雲山平塩寺の墓所があり、五輪の石塔があつたが倒れて畑中に埋まっていたので、この辺りを「五輪が原」ともいったという。

◆上手河原（わでがわら）

平塩にあった人家が川辺に移住し始めたころは、芦川は平塩の岡の裾を西流し落合村尻で笛吹川、鳴沢川と三川合流したものであるが、往古、「潭（たん）の下」というところにて堤を築き芦川を北へ回した処、たびたび切入り（堤防決壊）し、その都度被害を受けた。とくに明暦元年に潭の下ので堤と塩沢川堤

が切入り、さらに同年
上手河原竹藪より切入
り、檜村（保泉）を押
し流して御運上紙倉を
初め民家を流し、多数
の人馬が溺死したとあ
る。ここから思うに上
手河原は芦川を北に回
してできた町の一番上
手の河原ということであ
らう。

◆橋場
(はしば)

芦川橋のたもの一画。芦川橋は、昔は二本の丸太をかけて利用していたが、その後御陣屋が置かれてから、人馬の往来が繁くなり、三本に架け替えられ、次いで土橋になったが、出水の度に流出し何度も架け替えられ今のようになつた。

◆保泉
(ほずみ)



図 3-1 市川地区中央部と周辺の主な地名

市川本町駅と金剛院坂の下手、三丁目の南詰めの一帯をさす①。昔、「檜村」と呼ばれていたが、度々大火に見舞われたため「穂積」と改めた、しかしその後火事が多かったもので、さらに「保泉」と改称したと伝わっている。この地には鬼の伝説があり、今も大石に「鬼石」と刻まれている。

◆御陣屋（ごじんや）

巨摩・八代二郡と河内領を支配した市川代官所陣屋のあったところ。国中地方には、甲府、石和、市川に代官所があり、この施設を陣屋と呼んだところからこの地名がついた。

◆七軒町（しちけんちょう）

七軒町②は、古くは竹藪が続き、安永四年（一七七五）までは善福寺と大竜寺のみで民家はなく、その後大竜寺の門前の竹藪を伐り開き長屋を建てたのがはじまりである。寛政年間（一七八九〜一八〇一）、善福寺が前の竹藪を伐り開き、当時の街道河内路に沿って一棟の長屋を建て、その後も長屋が増え七軒になり、「七軒町」の名が起こった。

◆竹越（たけごし）

七軒町の近くに竹越がある。大竜寺の前の往還の近くに竹藪があり、この藪を越えて西

へ向かったのでその名が起きた。竹藪が続き、昼でも物寂しい所だったという。ここには「おまん女」という老狐がすんでいて、度々美女に化けて人をたぶらかしたという伝説があった。

◆野中（のなか）

「野中山宝寿寺という寺あり、故に山号を字となす」と言われている③。県道四尾連湖線の西側で鳴沢川と身延線に挟まれた所である。芦川が宝寿寺の北を流れていたころ、芦川との間は鳴沢川の氾濫原であって湧き水の清水もあったという、当時は見渡す限り野原であったのだろう。

◆八幡（はちまん）

八幡神社の一带は、八幡前、八幡東、八幡西など、社頭や東西に八幡を冠する地名がある。八幡神は集落の守護神であり、平塩の岡から最初に移り住んだのがこの神社の辺りではなかったかと考えられている。

◆大門（だいもん）

大門は八幡神社の前通り辺りを指すが、八幡神社の隨身門があったとか、八幡神社の西にあった光明院の大門があったとか、また上野の御崎神社（表門神社）の大門があったと



図3② 七軒町の標示



図3① 保泉の標示

か、平塩寺の大門があったと諸説ある。ここでは八幡か光明院の大門と考える。

◆八乙女（やおとめ）

もとの八乙女神社があった辺り一帯、以前の社殿は今の市川幼稚園の所にあった。

◆富士見（ふじみ）

旧の市川大門町内で、唯一富士山が見える場所だから。

◆西条（にしじょう）

昔、西条山返照院という寺があり、その山号を字とした。平塩の市川本所から市川新所に最初に移り住んだ所は、八幡神社のあたりとされ、そこから西に集落が拡大して行ったと思われる（東南方向という説もある）。

当時、集落の南を流れる芦川と北を流れる笛吹川との間の一番西に位置する所。高田の人家はもとこの地にあったという説もある。

◆新町（しんまち）

往古、芦川は平塩の岡の崖下に沿って西流し、現在とは川筋が異なっていた。平塩から市川新所に移り住んだころはこの辺は水害の心配もなく、田も開けた。その田の中に人が住むようになり「田の中に出たる人家」なるために「新町」と呼んだ。ここにも道祖神や

八幡宮がある。

◆若宮（わかみや）

若宮は新町村の産土神若宮八幡宮があったので、若宮の字が付いたと思われる。

◆押切（おしきり）

釜無川、笛吹川、芦川の三川が合流した三川落合のところ、現・富士見団地の西側である。釜無川の水勢が強く出水の度に堤防が押し切られたのでこの名が付いた。

また「押切戸」とも言われ、対岸の南湖との間に渡舟も通っていた。三川はその後何度も河川改修が行われ、現在に至っている。

◆北河原（きたがわら）

六丁目の県民信用組合の所を北に向かう山口（小字内の地名）の角から北線通りまでの間を差す。往古芦川が村の南を流れし頃、北の方へ折れて切り入り河原になった所故、北河原という。西河原は北河原に続くところ。今日では、これよりもっと広い範囲を漠然と北河原と呼んでいる。

また、古い文書によると、八幡神社頭より法伝寺境内にかかり、中北通りから東に曲がりし堤が往古あり、北の方へ堤を寄せ、その後空き地となりしところを安永年中



図3③ 野中の宝寿寺

*2 郷倉

中国の三倉の制が伝わったもので、穀物を備蓄し凶作に備えたものであったが、のちに、米価の調整を図る「平常倉」、富者が貧者を救うための「義倉」、組合を作り平等に穀物を出し合い有事のときに救い合う「社倉」があった。江戸時代は荒備貯穀の意味と、貢納は集落の全部集まらないと代官所に納入できないため、郷倉は貢納所として隣保共助、怠（滞）納防止と納税促進の円滑な役目を果たしていた。

(一七七二〜一七八〇)に請願し新田高入に相成り、この場所も北河原という、とある。

◆古倉 (ふるくら)

五丁目の言成地藏尊を祀つてある辺り。新蔵院がある。古倉は古蔵のことであり、古蔵は郷倉(郷蔵)*2に起因し、その地方の年貢米を代官所に上納するため村の人が納入する所である。後に、郷倉は芦川橋の南に移つた。(巻末絵図)新蔵院④は、古蔵のあつた所に建てられたのでその名が付いたという。

◆春日町 (かすがちよう)

「春」は湿地を意味するといわれている。芦川が町の南を流れていた頃、このあたりは伏流水が湧出するところだったと思われる。

◆落合 (おちあい)

昔、村の南を流れる芦川と笛吹川、鳴沢川が落ち合ったことから起こった地名で、代官所から高田を経て河内に通ずる主要道に沿う地である。地元では「オチャー」とよんでいる。

古倉から春日町の通りを経て県道と交差する手前から下手一帯を言う。かつては地名を示す標柱の辺りに村があつたが、度重なる水害により南に移つたようだ⑤。

◆平塩 (ひらしお)

平塩は塩沢川の扇頂部にあり、塩を産したかは定かでない。峡南地方の地名の中に、塩を「シヨ」「沮」と発音する例も多く、平塩の塩も「沮」(川の名、湿り気の多い地、湿地)と理解したほうが地形的に見ても合致する。塩沢川のあたりは、標高が高いわりには数メートル掘ると水が出てくるといわれ、掘り抜き井戸で畑に使っているとこもある。

◆御屋敷 (おやしき)

甲斐源氏義清の屋敷跡とか、天正十年(一五八二)に徳川家康が入国の折、この地に居留したところとかいわれている。

◆二の宮 (にのみや)

弓削神社(にのみやさん)のある一帯、印沢川の扇頂部と芦川の古い扇状地との接合部にある。

この辺りは、弓削神社にちなんだ地名がたくさんある。宮の下(神社の北側の通りあたり)、宮東(四尾連湖線の東側辺り)、御弓削(「ごよぎ」と呼ぶ、神社南側の御朱印地だったところ)、かつての神の地も今では住宅が建ち並んでいる。

以下は比較的新しい町名である。



図3⑤ 落合のお地藏さん(整備前)



図3④ 古倉の新蔵院

◆若木町（わかぎちょう）

南に七軒町、北に春日町、西を朝日町に挟まれた南線通り沿いの地。七軒町や春日町と呼ばれ不便を感じていた住民が、昭和三二年に町名を決めたという。

◆朝日町（あさひちょう）

市川の町の中で、朝一番に陽が差すところから命名された新しい町名である。

◆文教通り（ぶんきょう通り）

旧の市川小・市川中・現在の市川高校などがある文教地区に通じる通り。

◆一〜七丁目

江戸時代（図3-2）と現在の丁目（図3-3）区分とは基本的には範囲が少し違っている。

◆小学校の通学班

現在、市川小学校では通学班の呼称として、上町・平塩・本町・中央・御陣屋・八乙女・春日・美咲、落合、二ノ宮・富士見などと使っているようだ。もともとの地名よりも広い範囲や、新しい名称もある。

この他にも地名とその由来、地名の起こりはまだあるはずである。特に、大北・中北・出口などは判明出来なかった。ご存じの方のご教示を待ちたい。



図3-2 本通りの丁目の区分（江戸期）

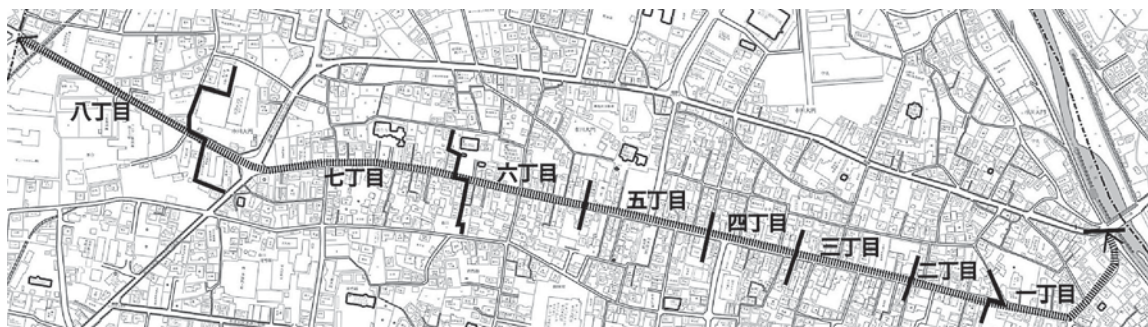


図3-3 中央通りの丁目の区分（現代）

*1 江戸期の一〜七丁目

いつのころから始まったか定かでないが、本通りにそって一〜七丁目に町が区分されていた。この七町に大北（上北河原。保泉、春日町、落合を加えた十一町を行政区分として用いていた）よう、江戸期の文書に散見されている。特に紙漉は、運上紙が金納になった寛政六年以降、町（丁目）ごとに「紙漉五人組」「月番」「町代」をおき、運上金の割り付けや取り立て、漉舟改め、楮仲間人との交渉など紙漉に冠する諸問題の対応を行っていた。旧は、落合を除く十町は「上市川」「下市川」と大まかに区分されていた。

コラム六 夢窓国師と平塩の岡

◆夢窓国師御母堂の墓

市川地区中央部の南に位置する平塩の岡に『夢窓国師母堂の墓公園』がある。南北朝時代、夢窓疎石は七代の天皇から国師号を賜われ、「七朝の国師」*1と尊ばれ、あの時代の最高の指導者が在られた。

夢窓疎石（国師）⑥は、建治元年（一二七五）伊勢の国、現在の三重県鈴鹿市三宅町で生まれ、弘安元年（一二七八）四才の時に、一家を挙げて平塩に移り住んだが、その年の八月に母を失った。国師の母堂は、乾氏の娘とも平政村の娘ともいわれ、墓所は平塩寺境内にあつたと伝えられている。



図3⑦ 夢窓国師座像（重要文化財）
古長禅寺パンフレット）

上京した国師が甲斐を訪れる時にはしばしば墓参した。在る時、杖にした梅枝を墓側に挿しておいたら、それが根付いて「平塩の逆さ（さかさ）梅」の伝説が生じた。

現在、母堂の墓所は平塩の岡の一角に梅と桜に覆われてある⑦。面積五七九㎡で、中央に大正十三年（一九二四）十二月一日に東郷平八郎元帥の題字で建立された「夢窓国師母堂碑」がある⑧。また、文久年間（一八六一～一八六三）鈴木徳右衛門が供養のため建てた野面石の石塔がある。

◆伊勢の国から市川大門への移住

夢窓疎石の父は宇多源（伊勢源氏）佐々木家の出身。第五九代宇多天皇の皇子一品式部卿宮敦実親王四世の孫の鎮守府將軍四下位左近將監佐々木成頼である。近江守に任せられ子孫世々江州の守護であつた。



母の一族に紛争があったため、夢窓の一家はあがて市川大門へ逃れ、住むことになった。市川大



図3⑦ 夢窓国師母の墓



圖 3 ⑧ 夢窓国師母堂碑

※1七朝の国師

国師とは、天皇陛下から授かる尊称でその時代の国家の最高の指導者に送られるものである。なお弘法大師等の大師は諡である。

夢窓疎石は七代の天皇から賜与され、七朝帝師とも称された。

- | | | |
|----------------|------------|--------|
| ○夢窓国師 | 建武二年（一一三五） | 後醍醐天皇 |
| ○正覺国師 | 貞和二年（一一四六） | 光明天皇 |
| ○心宗国師 | 觀應二年（一一五一） | 光嚴天皇 |
| 以上生前、遷化（一一三五）後 | | |
| ○普濟国師 | 延文三年（一一五八） | 後光嚴天皇 |
| ○玄猷国師 | 応安五年（一一三七） | 後円融天皇 |
| ○仏統国師 | 宝徳二年（一一五〇） | 後花園天皇 |
| ○大円国師 | 文明三年（一一七一） | 後土御門天皇 |

門は甲斐源氏武田氏の発祥の地である。父が源氏の家系であることが当地に住むこととなったようだ。夢窓疎石は、幼少のころから仏像を見れば拜んでお経を唱えていたという。

◆平塩山で修行、そして遊学へ

弘安六年（一二八三）九歳の疎石は父に連れられ平塩山の空阿を訪れた。彼は仏典や孔子・老子の典籍などを学び、十歳の時には七日で「法華経」を讀誦して母の冥福を祈り、人々はその非凡さに感心したという。空阿のもと十八歳まで修行をした。

正応五年（一二九二）十八歳で奈良に行き、東大寺戒壇院の慈観律師に従って受戒した。

さらに甲斐の国の乾徳山、国師岳等に、遊学してより深く仏教の教学を学んだが、天台教学の講師が死に臨んで苦しみ醜態をさらすのを見て、学問的研究だけでは生死の問題を解決することはできないと悟り、禅の教えに傾倒していった。

◆夢窓疎石と号す

そんなある日、疎石は夢の中で中国の疎山・石頭を訪れ、そこで出会った僧から達磨大師の像を預かり、「これを大切にするように」と

言われた。目覚めた彼は、自分が禅宗に縁があると考え、疎山・石頭から一文字ずつとって疎石と名乗り、夢の縁から夢窓と号したという。

二十歳になった疎石は京都に上がり、建仁寺の無隠円範について禅の修行に入った。翌年十月には鎌倉にて高僧に歴参し、いずれの師にもその聡明さを賞賛された。

永仁五年（一二九七）建仁寺の無隠に再び侍すが、八月、一山一寧が来日すると、すぐに教えを受けている。正安元年（一二九九）、一山が鎌倉建長寺に住することになると、疎石も従い、諸家の語録を学び修行を重ねていった。

◆多くの寺院を再興・創建

正中二年（一二三五）春、後醍醐天皇が京都南禅寺の住持に疎石を招くが、翌年には鎌倉へ赴き、その後二年間円覚寺に住した。長年荒廃していた円覚寺は疎石によって復興している。

元弘三年（一一三三）後醍醐天皇の詔により京都臨川寺開山、また南禅寺住持に再任され建武二年（一一三五）には夢窓国師の号を下賜されるなど、天皇からの崇敬はますます深くなっていった。この頃、足利尊氏が疎石に対して弟子の礼を執り、疎石は尊氏を悔悟させるため怨親平等を説き、安国寺利生塔の建立を勧めた。

へ夢窓国師開山の寺へ

- 浄居寺（甲斐）○瑞光寺（播磨）○龍山庵（甲斐）
- 補陀寺（阿波）○古谿庵（美濃、現永保寺）
- 臨川寺（山城）○吸江庵（土佐）○天龍寺（山城）
- 善応寺（伊勢）○真如寺（山城）○南方庵（鎌倉）
- 瑞泉寺（鎌倉）○古長禅寺（甲斐）
- 恵林寺（甲斐）○清白寺（甲斐）

へ夢窓国師作の庭園を持つ寺へ

- 天龍寺（山城）国の特別名勝
- 西芳寺・苔寺（山城）国の特別名勝
- 永保寺（美濃）国の名勝
- 瑞泉寺（鎌倉）国の名勝
- 恵林寺（甲斐）国の名勝

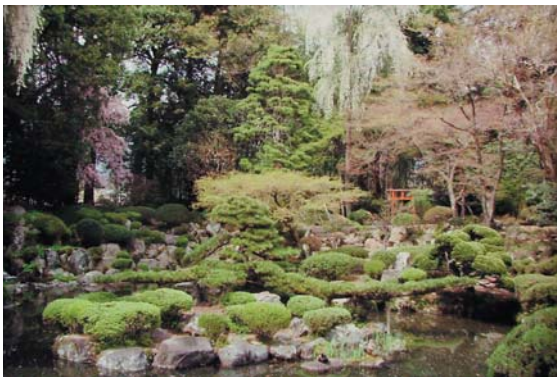


図3 ⑨夢窓国師作園と伝わる恵林寺の庭園

暦応二年（一三三九）八月に後醍醐天皇が崩じると、尊氏は疎石の進言を受け天龍寺の開創事業を行い、康永四年（一三五二）には後醍醐天皇七回忌法要を兼ねて盛大に落慶法要が営まれた。観応二年（一三五二）には僧堂が落成した。疎石は一度は雲居庵に退き、弟子の教化に当たっている。同年八月の後醍醐天皇十三回忌法要の翌日、疎石は病の兆候を見せて臨川寺に退去し、九月三十日、衆生に親しく別れを告げて示寂した。七七歳であつた。

◆乾徳山恵林寺

恵林寺（甲州市塩山小屋敷）は臨済宗妙心寺派で、本山は京都の妙心寺（右京区花園）



図3⑩ 夢窓国師作の天龍寺の庭園

元徳二年（一三三〇）夢窓国師（五六歳）が開山した。本堂裏に国師築庭の心字庭がある。戦国時代、甲斐の国主武田信玄公が菩提寺に定め、当時の住職、快川和尚に帰依する。県内では他に浄居寺（じょうこじ・山梨市）・清白寺（同）を開山し、古長禅寺（南アルプス市）の再興もしている。

◆夢窓国師に学び平塩の岡の整備を

「夢窓国師」は、今から約七四十年前前に伊勢の国に御生まれ、四歳の時に伊勢の国より市川大門に生まれ、その年の八月にご母堂を亡くされた。九歳の時に平塩山寺の空阿・仏門に入られ十八歳まで厳しい修行された。その後京都、奈良、鎌倉、甲斐の国等にて修行を重ねた。そして、南北朝時代後醍醐天皇を始め、光厳天皇。光明天皇。足利尊氏、直義兄弟をはじめ、教化を受けた者一三、〇四五人と伝わる。朝廷からも篤く帰依され、歴朝は疎石の徳を尊び、夢窓・正覚・心宗・普濟・玄猷・仏統・大円の七つの国師号を下賜している。また、多くのお寺の開山や再興と庭園の造園もされた。

そのような素晴らしい国の宝であられた「夢窓国師」が、少年期に一所懸命に勉強・修行

された地が市川大門平塩の岡であつた事を、子や孫達に、市川・平塩の岡の素晴らしさ、勉強等の大切さとして伝えたい。

また、県や市と協力して『夢窓国師御母堂の墓』周辺の整備を、広く寄付を募り、『愛』を結集して多くの住民が集えるようにしていくと良いと思う。車四・五台の駐車場の整備をすれば多くの人々が集うであろう。そして、鈴鹿市や恵林寺の甲州市、鎌倉市等との交流を進めたい。先人の素晴らしさも学び、市川・平塩の岡を活性化したいものである。



図3⑪ 夢窓国師が示寂した臨川寺

コラム七 「市川八景」

その地の景勝地と風流を愛でた「〇景」は各地にある。当地にも「市川八景」があるが、いつできたか定かではない。山梨県の「甲斐八景」は享保年間（一七一六～三五）に柳沢吉里が定めたという。隣村の「高田十八景」は、文政二年（一八五）、西光寺の俳句の会で定めたという。因みに、水神暁雨、浅間返照、清水芹引、桐田蒲公英、出口蝶、古川流螢、曲青田、西光夏月、久保春秋、三橋の涼、鬼窪初風、黒木紅葉、梅沢行秋、藤川漁火、宮田鴨、沼田氷、長生の晴鐘、正体に霞である。市川八景も江戸中期にできたものであろう。

「魁春園梅花」

弓削神社境内にあった「魁春園」である。通称「梅屋敷」とも言われた。創設時期は定かではないが、安政年間に当時の代官荒井清兵衛が、神社に詣でた際に、境内にあった老梅の姿に感銘したので、更に梅の木数十株を植え、「魁春園」と名付けたという。その後荒廃状態となり、大正四年天皇即位御大典を記念して、梅の木数百株を増植し町民に親しまれたというが、今はその面影はない^⑫。

「芦川橋納涼」

清流芦川に架かる芦川橋付近^⑬は、夏の夜暑さを凌ぐ納涼には、最適の場所だった。芦

川は町民にとって年間を通して格別な存在であったようだ。

それを伺わせる昭和初期の一文を紹介する。「春は、岸辺に咲く名も知れない小さい草の姿を映して、物憂げに流れて行くその水色こそまた趣のあるものだ。夏は、青葉の匂いをたつぷり浴かし、水辺に遊ぶ児等を喜ばせ、或いは夜は納涼の客が疲れと暑さを凌ぐところとなる。そして流螢を追い哀訴する様な河鹿の鳴き声に耳をすますのである。水はいよいよ清澄さを増す芦川の、秋の夕べにまさに没せんとする夕日に、真紅染まって乱舞するその状は、やがて名月こうこう銀波を漂わす水の景色と相俟って得もいわれぬ風情である。冬の景色も言わずもかなで、四囲が真っ白に埋められた中を一条の細き流れは、音も立てずにうねりうねっていく、この時こそ芦川は一年を通じて最も素朴さと淋しさを持つのである」と記している。

「小御崎夜雨」

西条にある小御崎明神（小御崎神社）^⑭のこと、かつて社の周囲は松の木が鬱蒼と茂り、その遠景は素晴らしい眺めであったという。夜になると四囲は静寂として冷え、松露



図 3 ⑫ 弓削神社の樹林

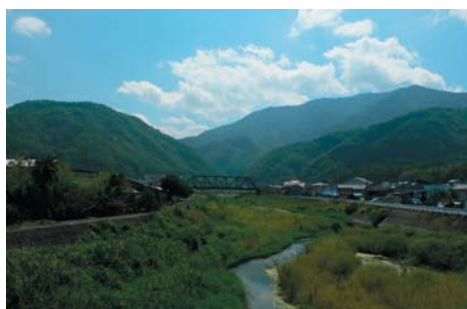


図 3 ⑬ 芦川橋から南を望む



図 3 ⑭ 名残を残す小御崎神社

はあたかも雨かとまがうばかりに庭石や鳥居の注縄をしっとり濡らし、それに四季折々の月の姿が映る景色は、言い難い淋しさで慰めを人々に与えたと言う。今はその面影はない。

「烽火台秋月」

城山⑮（通称おせんげんさん）のことで、一番高いところに烽火台があった。武田氏時代には跡部蔵人が警護に当たり、徳川時代には大須賀康高が守兵を配していた。その上空に差しかかる秋の月は見事であるという。その風景は今でも見ることができる。



図 3 ⑮ 城山を望む



図 3 ⑯ 宝寿院の桜と鐘楼



図 3 ⑰ 平塩の岡から西側を望む



図 3 ⑱ 押切の青洲堤碑と刑場跡碑

地があつた。ここに集まる雁の群れは見事であったという。

釜無川、笛吹川、芦川がかつて合流していた三川落合のところ、今の富士見団地の西に釜無川の水勢を防ぐ堤があり、その南側に沼

平塩の岡は、甲府盆地を一望し西に南アルプスや遠くは八ヶ岳・秩父山系を眺める景勝の地である⑮。かつて一帯は松が生い茂っていて、夕陽に照らされた松林は素晴らしい眺めであったという。いまはここから北に燦めく夜景を堪能できる。

「平塩岡夕照」

明け）の雪は、素晴らしい眺めであり、その風景は今でも見ることができる。

「蛾眉峰晨雪」

宝寿院⑯は南側の高台にある。町民には時を告げる鐘として、毎日聞き慣れたものであった。二百五十年以上前から里人に時を告げていたと言われ、かつては鐘の音は現在の南アルプス市辺りまで聞こえたと言われる。

蛾眉峰とは蛾眉山（蛭ヶ岳）のことで、市川高校の校歌の一節に出てくるが、残念な事に市川高校からは本物の蛾眉山は見えないし、町内からも見えない。城山⑮を蛾眉山と間違えたものと思われ、この八景も城山とおもわれる。この城山に降った早朝（晨）または夜

「押切沼落雁」

釜無川、笛吹川、芦川がかつて合流して